

作品と人、人と人のつながり

—浅井和春先生から学んだこと—

大 澤 信

はじめに

現在、九州と朝鮮半島の上に位置する国境の島・対馬で、2020年の開館を予定している新博物館の建設準備に携わっている。人生とは実に不思議なもので、浅井和春先生との出会いがなければ、こうして美術史の研究を続け、また対馬に来ることもなかっただろう。

私は、美術史や文化財を通じて日本と韓国をつなぐ存在になりたいという意識と目標を持って研究や仕事を進めている。韓国・朝鮮美術史を専門としているが、ある種マイナーといわれる分野を選択したのは、先生のアドバイスがあったためである。ここでは先生との出会い、教育方法、そして韓国での思い出を振り返りつつ、先生から学んだことを紹介してみたい。

浅井先生、そして韓国美術との出会い

他大学で東大寺法華堂不空罽索観音像をテーマに卒業論文を書いた私は、恐れ多くも、研究を深めるためその大家である先生のもとで修士論文を書きたいと考えていた。青山学院大学への進学を決めた大学4年生の冬、はじめて研究室を訪れたときのことは今でも鮮明に覚えている。

「法華堂の仏像について研究したいと思っています」と言った私に、先生は「君、中国語はできるの?」と質問された。私は全くできない旨を伝え、先生は「じゃあ駄目だね」とおっしゃった。私は囲碁の戦法を学ぶために韓国語の勉強をしていたことから、何か言わなきゃと思い「韓国語ならできます!」と答えると、今度は「君、韓国の美術をやる気はないの?」と尋ねられた。法華堂の成立背景には新羅華嚴が深く関わっており、もともと韓国の仏像を研究したいという思いもあったため「あります!」と即答。このようなやり取りから韓国・朝鮮美術史研究の第一歩を歩みはじめたのである。

その後、1年間の大学院浪人を経て入学し、いよいよ先生のゼミがはじまった。ゼミでは正倉院文書・造石山寺関係資料を輪読したが、他の学生たちはスマートに終わるのに、なぜか私の番になると3~4週続くことが多々あった。当時はゼミの準備で手一杯になり、なかなか苦しかったが、いま思うと易きにつきがちな私の性格を見て、細かいことを丁寧に調べる習慣を身につけさせるためのものだったと、感謝の気持ちでいっぱいになる。

修士2年の時にはソウルの梨花女子大学に1年間留学した。留学を決めたのは、大学院入学前にソウルの韓国外国語大学で1ヶ月間韓国語を学ぶなかで、現地に拠点を置いて研究することの重要性を痛感したためである。先生とのやり取りがきっかけとなって始めた韓国・朝鮮美術

史研究を通じて、韓国の作品を知り、人に会い、その文化や歴史に魅力を感じ、留学以前とものごとの見方・考え方が大きく変わった。この1年間は人生にとっても最も大きな転機となった。

先生からは常々「誰もやらないことをやりなさい」というアドバイスを受けた。美術史研究のセンスの欠片もない私が学界で生き残るためには、誰も手をつけないテーマで研究することが最良の活路と考えられたのかもしれない。こうして高麗～朝鮮時代の仏教美術史研究に取り掛かり、修士論文では「被帽地藏」という頭巾を被った地藏菩薩像を主題とした。なかでも対馬に伝来した作品の年代を検討し、朝鮮半島における被帽地藏の図像の受容時期について考察をおこなった。今ではこの仏像が縁となって対馬で博物館建設に携わり、また2017年夏～秋には対馬市と九州国立博物館との共催で「対馬―遺宝にみる交流の足跡―」展を開催できた。つくづく作品と人、人と人をむすぶ「縁」を感じる。

浅井先生の教育方法

先生は、学生に「答えを教えないで考えさせる」力量が群を抜いて秀でていていると感じる。大学院に入学した頃は、展覧会や調査旅行に同行して質問すると、「君の質問は素朴すぎる」と一蹴されることが多々あった。そのとき、聞く前に自分で考えることの重要性に気づき、少しでも先生の思考回路をのぞき見したいとの思いから、先生と少し距離を置き、先生が作品のどこを観ているのかを観察していた。彫刻であれば、顔にはじまり、全体のプロポーションへ、そして装飾や衣文などの細部を観察し、最後に全体に返り、顔に終わるという見方を学んだ。とくに腰付近の立体感を観察することの重要性を学んだ。

話が少し脇道にそれるが、私は物心がつく前から囲碁を習っており、中学から高校にかけてはプロ棋士が集う道場(国民栄誉賞を受賞した井山裕太七冠も時折顔を見せていた)に通っていたが、「答えを教えないで考えさせる」という教育方法はそこに通じると思うことがしばしばあった。囲碁も先入観が棋力の向上を阻むことがあるため、道場の師範から打ち方を教わることは一度もなく、定石(最善とされる打ち方)の本を読むことも良しとしなかった。たとえば、人間が悪手として数十年採用しなかった手が、実はその後の打ち方によって絶妙な一手になることもあり、それは近年 Google Deep Mind が開発した「AlphaGo(アルファ碁)」が証明している。

先生からは「ものごとをパターン化して考えず、常識や固定観念を頭の中で一度ガラガラボンしなさい」という指導を受けた。これは頭では理解していても実際におこなうことは容易でない。しかし、先行研究やこれまでの年代を改めて検討することは、美術史学を修するうえで最も重要な作業であり、こういった指導がなければ、作品観察の重要性、つまり「自分の物差し」をつくって作品を観察することの喜びを感じることはなかったし、修士論文をまとめあげることもできなかった。

韓国における美術史研究の学界は学閥意識が強く、長い間定説とされていた見解(大御所の見解であればなおさら)に異を呈することが難しい。それゆえ韓国の仏教美術史研究においては、

研究の蓄積が多い三国や統一新羅、そして高麗時代は少なく、造像銘が多く残される朝鮮時代後期の仏画・仏像へと関心が移っている。また近年では、形式論を様式論と取り違えて形式のみで年代を導き出したり、また欧米の方法論に学んだ研究者が様式論を軽視する風潮がある。

こういった時勢において、作品観察の重要性、そして様式論の重要性に気づけたことは先生との出会いの賜物である。今後は「自分の物差し」で日本に所在する渡来仏を日本の対外関係史、そして韓国・朝鮮美術史の枠組みに改めて位置づけていきたい。

図1 慶州仙桃山磨崖三尊仏の調査

浅井先生と日韓交流

先生とは、これまで計5回、韓国での調査旅行をともにしている。ソウルの梨花女子大学に留学していた2010年には韓国国立中央博物館の「高麗仏画大展」をはじめ市内の博物館・美術館をめぐる。2012年には国立慶州文化財研究所の金東河さんの案内で、釜山を出発し、内院寺(石南巖寺)の石仏、康津の高麗青磁博物館、木浦の国立海洋遺物展示館、全州や益山の弥勒寺を回り、その後、梨花女子大学の朴亨淑さんの案内で、瑞山や泰安の磨崖仏を踏査した。2015年には春に慶州をめぐり、秋には韓国国立中央博物館の「古代仏教彫刻大展」の見学に同行した(図1)。2016年には、仏教美術史学会主催の学術大会が梁山通度寺聖宝博物館で開催され、先生が基調講演をおこない、私はその通訳を任された。

先生も東京国立博物館に勤務して間もない頃に韓国に長期滞在し、多くの研究者と交流を重ねたとうかがっている。2015年の慶州踏査では、金東河さんのはからいで威徳大学の朴洪國先生と約40年ぶりの再会を果たし、朴先生が夜に宿を訪れて2人で昔話に花を咲かせている姿を見て、今まで日韓の学術交流が続き、その恩恵を受けることができているのは、先達が人と人の関係を大切にして綿々と受け継いできた結果だということを改めて感じた。今後は自分がその一端を担うという意識を持って、人とのつながりを大切にしていきたい。

おわりに

先生と出会ってからの約10年間、作品の見方や研究の方法はもちろんだが、人との接し方、人を成長させるためにどのような指導をおこなっているかを直に学べたことは自分の人生にとって大きな宝物だと思っている。また先生との出会いがなければ、学問を追究することの喜びを知ることはなかっただろう。今後は先生から学んだことをしっかり胸に刻み、次世代に伝えていきたい。

(2011年度本学大学院博士前期課程修了／対馬市博物館建設推進室)